

## &lt;レポート&gt;

## 平成17年度「日本における光化学オキシダント等の 挙動解明に関する研究」研究会について

平成17年5月26日、27日、京都駅近くのキャンパスプラザ京都において、「日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究」の研究会を開催したところ、全国環境研協議会会員機関や国立環境研究所等の43機関から58名の参加がありました。

本研究は、国立環境研究所と複数の全国環境研協議会の会員機関と行う共同研究(C型共同研究)として実施しています。

この共同研究は、平成16年度から「日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究」として京都府保健環境研究所が事務局となり、参加機関は平成16年度の32機関から17年度には37機関に拡大しており、今回は平成17年度第1回目の研究会として開催しました。

国内における光化学オキシダント濃度は恒常的に環境基準を達成しておらず、平均濃度も年々増加の傾向にあります。そこで主な研究テーマとして次の7項目を掲げ、7グループに分かれて共同解析することにより進めています。

- ①海陸風前線の到達時間、距離及び濃度
- ②ヒートアイランドが発生したときの影響
- ③日没後もオキシダント濃度が下がらない原因
- ④NO<sub>x</sub>及びSPM等との関係
- ⑤大陸からの移流又は成層圏オゾンからの流れ込みと光化学反応
- ⑥平均気温・日射量との関係
- ⑦測定器の誤差、継続性等の検討

本年1月に開催した前年度の研究会で各グループごとに今後の取組の方向を決め、今回はその中間報告を行いました。各グループが共に精力的に解析を行っていたので、9月に名古屋市で開催される大気環境学会に7テーマを発表することになりました。この研究会に対する参加者の意気込みと研究の意義を改めて強く感じた2日間でした。

研究会の内容は次のとおりでした。

○第1日目(5月26日 13:00~17:00)

(1)あいさつ

国立環境研究所PM<sub>2.5</sub>・DEPプロジェクトリーダー  
若松 伸司  
京都府保健環境研究所長 中川 雅夫

(2)「日本の大気質に及ぼす越境汚染の影響」

国立環境研究所 大原 利真

(3)「大気質予報システムの開発状況と仕様の概要について」

国立環境研究所 菅田 誠治

(4)「オキシダント高濃度日の出現特性」

国立環境研究所 早崎 将光

(5)「大気環境時間値データ集計プログラムの改良について」

国立環境研究所 宮下 七重

(6)「アジア域の越境汚染の5年シミュレーションとデータベース化」

九州大学 鶴野伊津志

(7)「北海道におけるオキシダント濃度の状況について」

北海道環境科学研究センター 秋山 雅行

(8)平成17年度新規参加機関の解析結果

○第2日目(5月27日 9:00~15:00)

(1)各グループ中間報告(各グループリーダー)

(2)各グループ会議

(3)グループ会議のまとめ(各グループリーダー)

学会発表を行う題は次のとおりとなりました。

1. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(1) 京都府 山川
2. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(2)—日没後もオキシダントが下がらない原因— 岐阜県 三原
3. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(3)—光化学オキシダントとNO<sub>x</sub>・SPM・NMHC等との関連— 名古屋市 大野
4. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(4)—オキシダント濃度月別出現パターンの広域的分布— 長崎県 森
5. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(5)—光化学オキシダントと比湿(湿度)及びBe7との関係について— 福岡県 大石
6. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(6)—NETEXを利用した成層圏大気の降下事例の解析— 福岡市 山崎
7. 日本における光化学オキシダント等の挙動解明に関する研究(7)—平均気温、日照時間とオキシダント濃度の長期変動について—一島根県田中 (文責:京都府保健環境研究所 山川 和彦)